京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024年　6月　18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　文学研究科

職 名・学 年　　教授

氏　　名　　家入 葉子

助成の種類	**令和6年度　・　国際研究集会発表助成**		
研究集会名	歴史社会言語学ネットワーク第13回大会		
発表形式	☐ 招待　・　☑ 口頭　・　☐ ポスター　・　☐ その他(		
発表題目	"When Did Americanism Begin?: Adverbs with -ly in 19th-century Missionary Documents in Honolulu"		
開催場所	スイス・チューリッヒ・チューリッヒ大学		
渡航期間	2024年6月4日　～　2024年6月9日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☑ 無　☐ 有(　　)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	費　目	金額(円)
		航空運賃(一部)	250,000円
		宿泊費(一部)	80,000円
		滞在費	
		学会参加費(一部)	20,000円
		その他	
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 無事に研究発表を終えることができ、また多くの国々の研究者と、有意義な情報交換を行うことができました。 円安によりスイスでの宿泊費が高額でしたので、大変助かりました。ありがとうございます。		

成果の概要／家入葉子

1. 歴史社会言語学ネットワーク第 13 回大会参加の背景

Historical Sociolinguistics Network (HiSoN)は、2005 年にヨーロッパを中心に創設された歴史社会言語学者の世界的なネットワークである。創設において中心的な役割を果たしたアウグスブルク大学（当時）の Stephan Elspass 氏がドイツ語学を専門領域としていたこともあり、このネットワークの顕著な特徴の一つは、英語のみならず、多様な言語を意識しながら、言語史の記述のあり方を再構築しようと試みる点にある。英語史を含め、言語史の多くがフォーマルな文体で書かれた文書や主要な文学作品の言語をもとに記述される傾向がある一方で、HiSoN の考え方は、言語活動にかかわるすべての人々、すべての言語使用の場面を研究の対象とし、特に日常の言語活動の実際を観察、記述することを重視する。現代語研究で 20 世紀の後半から盛んになってきた社会言語学の手法を、言語史にも応用しようとするものである。筆者はこれまでにも 2016 年に日本学術振興会二国間交流事業として、Stephan Elspass 氏とともにザルツブルク大学でセミナーを開催したほか、HiSoN が開催する研究集会にも時々参加しながら、同研究グループのメンバーと研究交流を行い、自らの研究成果を報告してきた。今回の渡航で参加したチューリッヒでの大会は、HiSoN の第 13 回年次大会（2024 年 6 月 5 日～7 日）であった。大会のテーマは、「Diversity and Uniformity across Time and Space」であった。

2. 研究報告の概要：“When Did Americanism Begin? Adverbs with -*ly* in 19th-century Missionary Documents in Honolulu”.

歴史社会言語学ネットワーク第 13 回大会で報告した本論文は、19 世紀にアメリカ合衆国の東海岸からキリスト教の布教（American Board of Commissioners for Foreign Missions の活動）のためにホノルルに移住した人々が残した文書の英語を調査したものである。筆者およびその研究グループは、この資料をもとに約 65 万語の Hawaii Corpus を構築し、その言語の分析を進めている。コーパスに収録されているのは、ジャーナル、書簡、自叙伝であり、その英語は教育水準の高い著者たちによる 19 世紀アメリカ英語である。

本研究では特に zero 副詞と-ly 副詞の選択に焦点を当てた。副詞を表す接尾辞-e の衰退により、形容詞と副詞が同形になり、現代英語ではいわゆる zero 副詞と-ly 副詞の対立が生じた。really happy のように-ly の語尾をもつ副詞を使用するかわりに real happy のように形容詞と同形の副詞、すなわち zero 副詞を使用する用法は、現在ではイギリス英語よりもアメリカ英語に特徴的に観察されると言われている。

中英語（1100 年頃から 1500 年頃）の後半から初期近代英語期（1500 年頃から 1700 年頃）にかけて-ly 副詞の拡大が顕著になり、その後は 18 世紀の規範主義の影響を受けながら、-ly 副詞は定着の方向に向かう。一方で、アメリカ英語においては初期近代英語期頃の古い用法として zero 副詞が温存されたとの見方がなされることが多い。一方で、Corpus of

Historical American English (COHA)を使用して deeply, quickly, slowly の 3 つの副詞と動詞の関係を調査し、zero 副詞のアメリカ英語での拡大は、むしろ 20 世紀後半の現象であると指摘する Shimizu (2017)のような先行研究もある。したがってアメリカ英語における zero 副詞と-ly 副詞の関係は、さらなる研究が必要な領域の一つであると言える。

Hawaii Corpus を利用した今回の調査では、調査対象がアメリカ英語であるにもかかわらず、-ly 副詞の使用頻度が極めて高いことが明らかになった。少なくとも-ly 副詞の拡大と定着に関して言えば、イギリス英語とアメリカ英語の本質的な差別化は、19 世紀にはまだ観察されないようである。扱った副詞の中には excessively, remarkably のように、100 パーセント-ly 副詞として観察できるものもあり、Hawaii Corpus の-ly 副詞の出現率は、筆者の手持ちの各種データと比較しても、かなり高いグループに属すると言うことができる。

全体として-ly 副詞の定着の度合いはきわめて高いので、一般に zero 副詞と-ly 副詞の選択にかかわるとされているさまざまな要因、たとえば副詞が動詞を修飾するか形容詞（および別の副詞）を修飾するか、副詞が動詞を修飾する場合には動詞の前に起こるか後ろに起こるか、副詞が形容詞を修飾する場合には、形容詞が限定用法であるか叙述用法であるか、などは、Hawaii Corpus ではもはや機能していないようである。一定数の zero 副詞を観察することは可能であるが、go slow, go quick, exceeding great, extreme old などの決まったコロケーションに集中する傾向が強い。zero 副詞の衰退は最終段階を迎え、特定のコロケーションに限定される形で残存している状況にあると解釈することが可能である。

以上より、近代英語期のアメリカ英語とイギリス英語の関係については、さらなる検討の余地があることがわかった。この点を指摘して、本発表を終えた。すでに筆者は、Iyeiri and Fukunaga (2023) においても、イギリス英語の特徴とされる The day had not the least appearance of a Sabbath（Hawaii Corpus より引用）のような本動詞 have の do を使用しない否定構文が Hawaii Corpus で多々見られることを指摘しており、イギリス英語とアメリカ英語の関係を論じる上で、後期近代英語期の実態の解明が重要な意義を持つことを再確認することができた。

参照文献

Iyeiri, Yoko and Mariko Fukunaga. 2023. “A Corpus-based Analysis of Negation in Selected 19th-century American Missionary Documents in Honolulu”, in *Language and Linguistics in a Complex World*, ed. Beatrix Busse, Nina Dumrukcic, and Ingo Kleiber, pp. 133-151. Berlin: De Gruyter.

Shimizu, Masahiro. 2017. “A Diachronic Study on the Dual-Form Adverbs *Deep/ly*, *Quick/ly*, and *Slow/ly* in American English 1810-2009”. *Zephyr* 29: 72-85.